

# 日本夢文学志

堀切直人



沖積舎

# 日本夢文学志

堀切直人

江苏工业学院图书馆

藏书章



日本夢文学志

平成2年7月30日発行

著者\* 堀切直人

発行人\* 沖山隆久

発行所\* 株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町1-52郵便番号101

電話03-291-5891 振替東京3-177632

ミツワ印刷+小高製本

©NAOTO HORIKIRI printed in Japan

ISBN-8060-4544-6 C1095

---

目次

夢の綴り——島尾敏雄 2

赤児のように無恥な食欲——種村季弘 5

詳細目次 11

I 夢魔の森 \*序論 15

II 八幡の藪知らず \*夏目漱石と泉鏡花 61

III 黒衣聖母 \*芥川龍之介 115

IV 触手ある空間 \*萩原朔太郎 131

V 草木虫魚の楽土 \*岡本かの子・武田泰淳・島尾敏雄 257

あとがき 382

沖積舎版あとがき 384

## 夢の綴り

島尾敏雄

『日本夢文学志』は如何にも珍しい書物に思えたから、それについて何かを書きつけることをむしろ私は進んで承諾した。しかし、さて筆を執ろうとするとそれが甚だむつかしいことに当面しなければならなかった。

この大部な論攷の骨子については刊行出版主の西岡さんからずいぶん以前に聞かされ、おおよそを想像しつつ、その壮大な構想に圧倒されていた。私にしても内心自分流の文学史を組み立てたいと思っはいるものの、実際に着手するとなると大変な難事業であることに思い至らないわけにはいかない。そんな事情もあって新規の文学史づくりの計画を進めている人のことを聞くと、まずその果敢な勇氣に脱帽してしまふ。あらかじめ西岡さんから耳にしたうろ覚えによると、それは堀切直人さんの、夢という実存体験（と言えるかどうかあやふやだが）を手がかりとし、それへのかかわりを軸として日本の現代文学史を編み直す意志的な著述であることが理解された。おそらくそれは刺戟的な書物になるだろうと私は考えて心待ちにしていた。

いつのまにか時が流れ、五年ばかりが過ぎてしまったが、此の度いよいよその上梓が実現されることとなり、私ははじめてその校正刷りを見ることができた。予想していた通りの壮大な構想を持

ち、且つ刺戟的であることが確認できただけでなく、又それには多くの示唆が含まれているものであることがわかった。そしてやはり果敢な試み、という私の思いに付随するが如く、著者の、好みへの傾きが感じられたのであった。しかし私にはまだその全体のかたちがかつかめてはいない。書かれた筋道をつけて行くことはできるが、その道付けが妥当であるかどうかを判断するだけの視野が私はすこぶる狭いし、彼の構想の全体像も又まだ隠された部分が多くて充分あきらかにされていなくとも受け取られるのである。彼の論攷中に挙げられた国の外の人々の作品や評論に接することは私には極めて少ないことだし、国の内部の人々でさえ、江戸川乱歩や小栗虫太郎についてこそとなく少青年時にその作品の多くに接することがあったと言えるものの、夏目漱石や泉鏡花、芥川龍之介、武田泰淳に対しては若干のわがままな読書体験しか持っておらず、萩原朔太郎と岡本かの子に至っては全くお手挙げの状態ではないのだ。ただもう一人の島尾敏雄だけはつまり当の私であるから、その作品は全部承知しているはずだと言えるに過ぎないのである。

そこで、全体の論旨が持つ起爆力等についてはもう少し時を待ち追いついて追いついて考えることにして、私の作品が論じられた部分だけの私の読後感を述べてみることにしよう。

結論を先に言うと、私は私の文学の中の戦い(或いは生活の中での戦いと重ねてもいいが)の基本的な姿勢をすっかり見破られてしまつて、驚いたのであった。驚いたと言いつてもそれは正確ではなく、或る快さを感じさせられていると言いつつ替えた方がいいかも知れない。否むしる彼の分析によって私ははげましくと勇氣を与えられたと言いつつ直そうか。殊に、彼が言うところの「夢魔の森」と「始源の森」のあわいの戦いに対する私の戦略と過程の抽出に於いて、私はそのことを強く感じた。どちらかと言えば私はそれを作品の行間に隠してきたのだった。隠したと言いつつ、ひそか

に埋めて置くようなやり方を採ってきた。勿論それはいずれ誰かが気づいてくれるかも知れぬことへの期待がこめられていたのだが。誰かがきつと掘り出してくれる！ そのひそかな呪文が解きほぐされたと思った。もっともこれまでも掘り当てられたかも知れぬと感じたことが全然なかったわけではないが、この書物の中ではそれが実に丹念におこなわれていると感受した。そのために私には一種の解放感が与えられたのである。その戦略面を「非超現実主義的な超現実主義の覚え書」などから引き出し、過程若しくは実践面を「むかで」などに見て行く彼の手さばきに、私は思わず嘆声を挙げかねなかった。私は私の炸薬と信管をどこに埋めて置いたのかも忘れてしまったほどだったから。忘れていたことの根深いもう一つの発見は、彼の筆が進んで行った先の佐藤春夫の『田園の憂鬱』なる作品存在の指摘であった。私はすっかり忘れていた。『田園の憂鬱』をあれほど夢中になって読んだ過ぎし日々があったことを。

彼の指摘で私は或る確かめを得た。(重ねてミニアチュア市街への傾きへの論及も忘れられないが。)とすると、他の作家たちの中でもそれに似た現象が起こっているのだろうか。そのことを今私ははっきり言うことはできないが、彼の傾きと私のそれがやや共鳴的である部分が気になることを別にすれば、その可能性は充分考慮に入れて置かなければなるまいと思っている。とにかくこの論攷は拡散と収斂のあやしい魅力に満ちているのだから。

## 赤児のように無恥な食慾

——堀切直人『日本夢文学志』について——

種村季弘

堀切直人の世界はどこまでも凹型である。人間の身体器官にたとえて言えば、突起した男根の色好みだの、音や情報に敏い耳だの、攻撃用に飛び出す手だの、のような突出部にはほとんどまったく縁がない。鼻や目玉や手のような突起物も、むしろ敏捷に活動してはいるのだが、それは、もっぱら凹型の器官である口腔に外界の異物を取り込むために、匂いを嗅ぎ分け、あり処や形を確かめ、しかる後にむずとばかり攪んで口中に押し込む、ただそれだけの従属的な役割を果たしているのにすぎないかのようだ。主役は、おそろしく肥大した主役は、ひたすら口唇であり、また口唇とひと続きになった消化器官のような体内臓器である。

メイ・ウェストのおそろしくもなまめかしい巨大な唇を描いたダリの絵画が思い起されるだろう。あるいはむしろハンス・アルプの「日がな一日 年がら年中」という詩に登場してくる、「巨大な揺り籠のなかに／生まれたばかりの嬰兒のように寄辺なく寝そべっている／かの大食漢」に似ていないこともない。

たえまなく

日がな一日

年がら年中



餌運び人たちは

梯子を昇り降りして

あくなき食欲に

ゴロゴロ喉を鳴らしている大食漢に食わせねばならぬ。

食いつかれないように用心しながら

おぞましい大口に器用に近づき

バケツの中味を放り込む

放り込む

たえまなく

日がな一日

年がら年中

いやしかし、そうかといって私は、彼がもっぱら受容一方の、ハンモックに鎮座してもりもりと鯨飲馬食するだけが能の、無芸大食の徒だときめつけているわけではない。そういう「子供のやうに意地きたない無恥の食欲」(秋原朔太郎)の持主であることはまぎれもない。同時にしかし、本書にも見るように、老大な文献渉獵の飽くことを知らぬ「餌運び」にまめまめしく立働いているのも彼なのだ。涯しもない無恥なる食欲にあんぐりと開いた大口も彼なら、そのために蟻のようにぞろぞろと行列を作って、「日がな一日 年がら年中」つらい餌運びに精を出すのも、同じ彼なのである。だから、嗅覚や目が対象を見誤って毒物をでも摂り込まない限り、受容と投入の循環は、星雲状の巨大な同心円運動を起しながらしかもたえず自足し、そこに羨むべく安定し充足した一つの世界が確然と成立する。

あんぐりと開いた口に昆虫のようなものがぞろぞろとつながって餌を運ぶ、この循環運動には、どこかファーブルの『昆虫記』の世界を思わせる、根源的な日常生活クオタイア・ヴィヴァとでもいった反覆性があるような気がする。民衆の祝祭空間につきまもの並列性といってもいい。いわばこの本そのものが、どこまでも涯しなくぞろぞろつながって行進する、イメージのページェントとしての動く森なのだ。鳥獣戯画や信貴山縁起のように絵巻物風にくり展げられる百鬼夜行の民衆的ページェントを連想し、ねぶた祭の行列やフォークロアの並列的継起的構成を思い浮べてもよい。何ならかりにファーブルをはじめとして、本書にもしばしば言説が引かれているヴィクトル・ユゴーやミシュレやバンユラールやバフチーンのような、あるいはまたエドゥワルト・フックスのような、民衆的博物誌家の系譜に連るイメージの大蒐集家の一人に堀切直人を教え上げたとしても、一向に誇張したことはならないだろう。

そのことはしかし、翻って彼の世界が単調で大まかだ、ということにはかならずしもならない。世界は巨大だが、その細部にはびっしりと微細な昆虫のようなものが詰め込まれており、風景は小人国のガリヴァーが俯瞰したそれのように、微小なミニアチュール模型として造型されている。まるで掌を伸ばせば一握みに食ってしまったそうだ。古代インド人のいわゆる世界食ホシシヅとしての、食えるものとしての世界である。おそらく堀切直人もまた、夜毎火山灰のように降りつもる夢魔襲来の危機に遭遇して、セシエー夫人の報告している少女ルネのように、細密なものの凝視を通じて、食えるものとしての世界と和解し、生を肯定する契機を掴んだのではなからうか。ルネにおける一個のリングゴ、岡本かの子の「鮎」の主人公における鮎に相当するものが、彼にあってはどこまでも続く蟻の行列のような細密な活字の連りつらね、すなわち書物だったのである。

さて、その書物をしこたま頼張って胃袋のなかでこき混ぜると、滋養はたちまち全身に行き渡っ

て六尺豊かな怪童の血肉と化し、ここに堀切直人の手になる、もう一冊の本が成立した。題して『日本夢文学志』である。

文学志と銘打ったのは文学史とは似て非なる著作だからであろう。文学の「歴史」という言説そのものがここ百年の文明開化の産物であり、近代文学史に特有の出来事であって、西欧近代産業社会の時間哲学受容からはじまった通時的遠近観であることは言うまでもない。堀切直人は、このタテ方向に整理された一方通行的な文学の流れを並列集合的な地誌に置き換える。これは、「文学史」が所詮「現実の」歴史にすぎないところの消息を看破した卓見である。一方、夢は通時的構造において直進する性質のものではないから、夢想という覗き穴から世界を一望すれば、どうしても森林的に錯雑し、繁茂し、相互に交感し合う渾沌の地誌が現前して来ざるを得ない。だから、同じ風景を前にしながら「現実的文学史」の強迫観念の貧寒なヴェールはみるみる掻き消えて、『日本夢文学志』の豊饒がおのずと立ち現われることになるのである。

くり返しになるが、このテキストが地誌的であって、歴史的ではないことは、いくら強調しても足りないだろう。そこには洞窟内部や貪慾な体内臓器のようにねばつく江戸川乱歩の夢魔の森が不気味に蹲っているかと思うと、酷寒と饑渴の外見のなかに古代緑地を韜晦している吉田一穂の水河が連り、花田清輝や安部公房の砂漠もあれば、岡本かの子の滔々たる川が流れ、島尾敏雄の迷宮都市や萩原朔太郎の横町が蜘蛛の手のように四通八達している。南北の緯度差のはなはだしい日本列島には、そのすべてが箱庭模型状にチマチマとながらもちやんと存在しており、測量家は、その気ならつぶさに实地に地形を踏査してこれを立体地図化することができる。

だからといって、しかし堀切直人を世の文学散歩作家や郷土誌家といった類の箱庭的観光案内人と同日の談にしては、怪童の足の寸法を軽んじることになる。彼は江戸川乱歩の『火星の運河』を

訪ねたその足でついでのように西欧の森林地帯をひとめぐりしてから、ヒマラヤの照葉樹林に足を伸ばして、それが私たちの文化風土における山川草木崇拜と一続きの地脈において循環していることを足裏にしかと感触してくる。ダリのカタロニアの砂漠が小野十三郎の大阪湾沿岸と、朔太郎の冥府的都市が大地母神の「女の世界」と、吉田一穂や花田清輝の荒涼たる無人地帯の風景がランボオの砂漠や北宋画の岩石風景と、対応し通底しながら、みずからの箱庭の細密性の裡にこれを取り囲む巨大な宇宙を原型的に押し包み密封している消息を、旅の土産話として鮮やかに打ち明けてくれるのである。

ささやかな町歩きや小旅行のついでにユーラシア大陸をひとめぐりしてくるその健脚は、ともすれば小列島内の狭小な自給自足のうちにみずからの遠い祖型との関連を見失って、平板な自画像を描くしか能のない文学研究者の与り知らぬ美德である。私たちの先達の作り上げた繊細な作品は、これをそのもの限りとしてではなく、背後に連なる宇宙の後背地からの巨大な倍音を通じてはじめて、その微細な構造の隠された面を増幅器を通してのように奏ではじめるのである。

むしろそうであるからといって、堀切直人は、世のアカデミックな比較文学研究者や西欧文学紹介者のように、海彼の新しい文学理論を半可通に振り回して対象を八ツ裂きにする暴挙に組したりはしない。そうするにはあまりにも親密に日本文学の胎内に馴れ親しんでおり、あまりにも対象を愛しすぎている。彼もまた、とりわけガストン・バシュユールの現象学を援用して、さまざまの作品のイメージを四大に還元してみせるが、それはあくまでもモンズーン列島の曖昧な大気や女性的な大地が見え難くしている細部に照明を投げ、潜在的な男性的骨格を際立たせて、地層構造を明快にせんがためであって、手段はそのつつましい従属性を堅持している。にも拘らず、日本文学がユーラシア大陸の「日本離れのした」地層の上に浮ぶ相対的な文化風土の産物であることを知った私

たちは、彼の案内につれて、つとに親しんでいると考えていた作家たちの意想外の貌に立ち会うことになるだろう。たとえば島尾敏雄の都市迷宮を神戸や長崎の実勢地図の上にはなくて、シルクロードの途上でサマルカンドの山岳都市に遭遇したマルコ・ポーロのような眼で見るすべを学ぶだろう。

個々の作家については、たとえば夏目漱石のように高度の研究が続出している現在では、あるいは物足りぬ憾みを抱かしめる概括もないではない。一方、氣質的に親密と思われる朔太郎や島尾敏雄については、ほとんど恍惚とした共鳴音が発せられて、おそらくその種の水準を抜いている。それもこれも、しかし彼の地誌学の地層構造のコンテキストとの対応において見るべきもので、個々の出来栄えをしたり顔に論じてはじまらないだろう。あえて一つを言うなら、マイナー・ポエツトたちのミニアチュール都市風景を論じた章は抜群であり、水族館の熱帯魚群の回遊風景を目のあたりにするかのようだ。

それにしてもこの、文学における夢の地誌作りははじまったばかりである。本書はおそらくアミイバ状に伸縮する触手の捉えるべき全体のほんの一部にすぎまい。著者の胃袋は馬鹿大きく、食慾は「赤児のように無恥」であって、健啖とどまるところを知らない。だがおそらくは、今後とも、堀切直人は情況評論家のようにカッコよくお座敷をうろつきはしないだろう。そうするには氣質が幸福に安定しすぎている。彼は悠然と腰を据えてひたすら食う。もりもりと桑を平げる蚕のように「日がな一日 年がら年中」食って食って食いまくる。それからそのころと肥えたアンコ型の胴体のなかから、おもむろに、とめどもなく、美しい繊細な絹糸を吐き出すのである。

日本夢文学志——始源の森へ 詳細目次

I 夢魔の森 \*序論

- 森の奥で17 江戸川乱歩の『火星の運河』17 夜道の怖しき18 闇に怯える嬰兒19 太古の森の記憶20 サルトルの『嘔吐』21 「蝮の水準にあるもの」22 「ほんとうの海」22 街を包囲する植物群23 肉腫のパニック24 臓器感覚25 中勘助の『ゆめ』26 マロニエの木の根27 鉱物の避難所28 物質的ベシミズム28 「隠れた自然」29 ユゴーの廃園幻想30 グロテスクなもの32 グロテスク文様とケルトの組紐文33 異教とキリスト教の相剋35 ルネッサンスから近代へ35 ロートレアモンとシュレアリスム37 「不可思議の森」38 エルンストとボードレール39 「石化した森」42 小栗虫太郎の『白蟻』43 「生きる欲び」45 「森の女王」46 弥生文化と縄文文化48 庭の世界48 水・四季・植物48 下部構造としての田圃49 縄文時代の照葉樹林文化51 森の迷路と蕃殖母神52 土器と土偶53 森の文化の凋落54 子供たちの世界55 叢のジャングル56 プレナンの『裏庭』56 怯えと冒険心57 狩猟採集活動と子供の遊び58
- II 八幡の藪知らず \*夏目漱石と泉鏡花
- 闇に取り残された孤児63 『夢十夜』65 森に憑かれる68 廊下と路地の迷路69 生きものへの怖れ70 蛇のモチーフ71 生母の記憶74 「永遠の女性」76 ロンドンの迷路77 「暖かい夢」78 『幻影の盾』—メデューサのモチーフ79 『薤露行』—薔薇と蛇81 百合の花83 導者としての小鳥84 死への憧れ85 オフィーリアのモチーフ86 世紀末の風土87 『草枕』—我執の女性87 『虞美人草』—「宿命の女」91 ネクロフィールな美への惑溺94 『三四郎』—森の女95 『それから』—温室から「夢魔の森」へ97 二元的対立の止揚98 泉鏡花の神話的世界100 迷路のモチー

フ100 蛇と花のモチーフ100 「宿命の女」と「永遠の女性」のモチーフ101 「高野聖」の森107

「鬼神力」と「観音力」111 水と大地の夢想112 審美主義への批判112

Ⅲ 黒衣聖母 \*芥川龍之介

「牛になること」117 孤児の悲しみ118 幻の女性119 「エピキュウルの園」120 「尾生の信」―永遠にやって来ない恋人121 『沼』―白い花のイメージ122 庭園の崩壊124 『歯車』―冥府めぐり124 動物的エネルギー125 「ふつくらとした重味のある乳房」126 「生活教」の寺院128 「黒いヴェヌス」と「黒衣聖母」128 死への憧れ130

Ⅳ 触手ある空間 \*萩原朔太郎

文化的伝統の不在134 夢魔的な感覚135 「自然の背後に隠れて居る」136 「先験的記憶」138 分裂病の少女の「光の国」140 『月に吠える』の鉱物界141 電光・金属・人形・書割141 リンゴのエピソード143 幾何学主義145 内臓の世界145 「生を憧憬する心」と「生をいとふ心」148 罪障コンプレックス149 「愛」の発見150 『青猫』150 「女の世界」152 ボードレールとミシュレの古代的女性像154 「幻像の都会」155 陰湿な森158 死との和合の夢161 夢の廃墟163 『水島』164 臆病な野獣165 「死なない蝟」165 触覚的ヴィジョン166 陰画と陽画168 蔵原伸二郎の原始境168 ●  
ダリのヨナ・コンプレックス169 柔らかいものと硬いもの170 「小人パトウフレ」の遊び172 腹中の世界172 「その手は菓子である」173 食欲と性欲の融合174 「夢の中なるちのみ兒」176 食人妄想176 「可食的なもの」177 存在喪失感178 怪物との闘い178 救いの女性179 萩原朔太郎の幻滅180 飢えと口唇サディズム181 北方と南方182 「洞窟の貝殻」と「地中海の太陽」182 ガウデアの建築183 ゴシックの森183 パロックの汎神論185 カーニバルの祝祭空間186 大地への還元186 グロテスクな肉体187 饗宴188 排泄物188 ロマン派とモデルニズム189 『嘔吐』―腫物・苦しげな

腹・汚物 190 朔太郎―「おかしな怪物」・「閑雅な食欲」・「粘土」193 ダリー室内生活者のナル  
 シンズム 199 ガウディー「全世界のための饗宴」・「海底の森」204 ● 近代のモチーフと飢  
 餓のモチーフ 210 『生ける死人』211 近代における単独者の悪運 212 ミシュレの「女の世界」213  
 ユゴーの「レヴィアタンのはらわた」215 ボードレールの饗宴世界 216 「恐怖に充ちた現在の暗い画  
 面」217 「石ころだらけの荒地」218 飢え・渇き・憎悪 218 群集と貧者 219 極地・鉱物界・砂漠 221  
 マラルメの石胎不毛の世界 221 幼年期のフラストレーション 222 口唇的自己 223 カフカ 223 「荒れ  
 はてた壁」と「葡萄の房」223 『変身』224 『断食行者』225 ペシミズムの袋小路 226 シュルレア  
 リストのオブチミズム 226 ランボーの渇き 227 「昔の饗宴の鍵」227 「飢餓の饗宴」228 伊良  
 子清白・蒲原有明・北原白秋の南方憧憬 229 日露戦後文学の密室志向 230 有明と白秋の「蠱の  
 露」230 大手拓次のナルシンズム 231 「水蜜桃」と「怪物料理」232 村山槐多の『悪魔の舌』233  
 中勘助の官能性と原始性 233 有明・白秋の密室崩壊劇 235 拓次のデカダンス 236 谷崎潤一郎  
 の厨房 237 ボードレールと朔太郎 238 精神分裂病質者の分裂感情 239 朔太郎における極地・鉱物  
 界・砂漠 239 「おねちやのかあにばる」242 「雲雀料理の愛の皿」244 「母の体験」への希求 244  
 祖母の記憶 245 「空家の晩食」246 飢餓の感情 246 震災後文学の「飢餓の饗宴」247 社会主義運動  
 との接触 248 花田清輝の「どん詰まりからの反撃」249 生の世界としての砂漠 250 「獅子の意志」251  
 吉田一穂の南方憧憬 252 「鳥獣の元始へ還る」254 「形而上的なふるさと」255 「穀物と葡萄の祝  
 祭」255

V 草木虫魚の楽土 \* 岡本かの子・武田泰淳・鳥尾敏雄

魚石のエピソード 259 根と魚のイメージ 260 石化作用からの解放 261 岡本かの子の『鮎』262 母親像  
 の分裂 264 水源地帯の結晶世界 266 南海への郷愁 268 「水の性の娘」と「山の性の娘」269 氷の城 270



ニーチェの「氷の国」271 昭和期の北方文学273 北方的心情と北方的精神273 吉田一穂274 砂漠的  
 精神の幾何学主義275 「極への誘い」278 「古代緑地」279 「暢達な水の世界」282 隅田川情緒283  
 水の深層領域284 熱帯の原始林285 都会のなかの密林286 「夢のなかの巨大な花」287 「物質の夜」289  
 仏教哲学290 草木虫魚の世界291 龍樹と観音信仰292 「食べる人」293 「天地の食欲」297 ブスケ  
 の「肉の前の夜」298 ガスカールの「根源的な子宮」299 エーレンツヴァイクの「子宮への回帰」300  
 海と森303 大地的想像力303 捏粉306 岸田劉生と高村光太郎307 大地の深層領域309 震災後文学の  
 岩石のインフェルノ310 地質学的方法312 ● 武田泰淳314 「球体派」314 『流人島にて』315  
 「柔らかな地層」の夢316 腐敗と生成317 原生林のヴィジョン319 庭の世界の没落320 『詩をめぐ  
 る風景』321 『廃園の女』323 女体の内臓露出324 埴谷雄高326 「根源的戦慄」327 殺意の両義性329  
 「肉食獣的な野蛮な力」331 植物性の文学と動物性の文学331 世界大の動物の食欲333 『ひかりご  
 け』の食人行為334 ● 島尾敏雄336 無機的な世界336 大地の内面的把握337 「玩具の世界」338  
 ボードレール338 『アスケーティッシュ自叙伝』ほか339 母との疎隔340 「小人国幻想」343 「ミニ  
 アチュア市街」345 佐藤春夫の『田園の憂鬱』345 『美しい町』347 稲垣足穂の「アーティフィシャ  
 ルな模型都市」348 原民喜351 俳句の方法と幾何学的方法353 「玩具の世界」から「地下世界」へ355  
 萩原朔太郎・谷崎潤一郎・江戸川乱歩355 「シャンデリヤの投影宮」360 部落と教会361 路地と旅  
 館363 「うごめく魍魎たち」365 「眼に見えないもの」との闘い366 『むかで』367 やっかいな人  
 間関係368 江戸川乱歩の厭人癖369 「世間恐怖症」と開かれた心371 迷宮と洞窟372 アニミズム  
 の世界374 皮膚感覚374 動植物への関心375 南島の自然376 部落の森378 一女性との出会い379  
 「夢魔の森」と巢穴380